

【研修報告】

修道誓願と靈性

(die Ordensgelübde und Gottlichkeit)

——西独・聖オットティリエン大修道院の弱りにて——

町 田 是 正

目 次

- (1) はじめに
- (2) 聖オットティリエン大修道院
- (3) 偉大なる牧者と羊たち
- (4) イエズスの愛とその実践
- (5) 大いなる放棄—誓願の意義—
- (6) 痛哭の別離と靈性の交流
- (7) ローマ法王との謁見
- (8) エピローグ—反省—

(1) はじめに

私は今なお現代の奇蹟を垣間みた感激と、めくるめく想いが交錯している。そこは西ドイツ南部バイエルン州—坦と広がる田園穀倉地帯、その沃野のなかに点在する森林は濃い緑の陰翳を織りなし、また大小の美しい湖はメルヘ

修道誓願と靈性(町田)

修道誓願と靈性（町田）

ンの世界をつくりだしていた。スイス・オーストリア国境アルプスの雪峯を霞み遙かに望む一点「聖オットイリエン大修道院」Sankt Ottilien Kloster は神祕の鉄扉を開き聖域を開放した。時を同じくして、西ヨーロッパ諸国内の由緒ある伝統を誇る幾つかの修道院も千古の重い扉をあけて日本仏教徒を迎え入れていた。⁽¹⁾

昭和五十四年の初秋「東西文化の源泉Ⅱ靈性の交流」⁽²⁾をテーマに掲げ、日本宗教界の代表者と西欧キリスト教界との間に国際文化交流が行われた。その交流の実施に当って次のプロジェクトが立案された。——(一)西洋的靈性を学ぶ。(二)禪的靈性と書画の品位。(三)講演会とゼミナールの開催。(四)靈的交わりの実践——これらの計画を基にして日本宗教界の代表者は、夫々のプロジェクトチームに編成されて靈性の交流を展開していった。

靈性 die Gottlichkeit, Geist⁽³⁾ は人間のあらゆる営みの源泉であるとされる。靈性の交流に際して日本・西欧の宗教者は、試行錯誤ながらも真摯に問題と取りくみ交流を深めた。それにしても、西側キリスト教界 die Christenheit⁽⁴⁾にしてみれば日本仏教徒は異教の徒であったが、修道院は異教徒を温く迎え入れたのである。当に千古の伝統を護るキリスト教会史上の歴史的な出来事となった。西欧キリスト教会の英断と、日本宗教界の勇断とがあいまって、東西靈性の交流する機会が実現したのである。

私は日蓮宗から唯一人、特別招聘者（代表者五十余名中、特別招聘者十六名）の待遇を得て渡欧、特異な修道生活を体験したのである。その毎日がめくるめく思いの連続であった。日蓮宗の僧籍を有し身延山の学僧が、ヨーロッパの空の下で修道院生活を体験したなどと云えば奇異に感じ不審に思われるであろう。然し私個人にとっては稔り多い成果を抱いて帰朝することができた。以下の管見記は、西ドイツ聖オットイリエン大修道院の翳りにおける想い、幾つかの教会・修道院を訪問研修した印象、ローマ近郊ネーミ湖畔の神言会修道院滞留体験、ローマ法王との接見など

を併せて、修道誓願と靈性、またイエズスの愛（隣人愛）の意味とその靈性交流の可能性を改めて考えるよすがといたく、この管見記を綴った。

(2) 聖オットイリエン大修道院⁽⁴⁾

昭和五十四年初秋（九月三日午後二時三十分）、私たちグループ六名と指導通訳者一名⁽⁵⁾は西ドイツの聖オットイリエン大修道院の鉄製門扉をくぐった。直に接待役の神父から各自に対して一つの「鑰」（かぎ）を手渡された。接待役とは修道院を代表する顔である。特にすぐれた修道士が当るという。事実、私たちの滞在中の世話をしたクリスティアン神父は、理学博士の学位を有し英独語並にフリカタンザニアの土俗語を解する学識者で、機智に富み、時にあざやかな手品を披露したり、微笑を絶やすことなく、私たちの為に献身をおしなかつた。さて、神父から手渡された鑰は柄が円環状で重味のある五センチ大のもので、「天国への鑰」と呼ばれ修道院のいたる所の扉を開けて自由に出入できる。このマスター・キーにも相当する「天国への鑰」を貸与された事は、私たち一行がその日から修道院の共同員（修友）であることが認められたことになる。異教徒に対するこの待遇は破格の特典であり、修道士（百二十名）全員が胸襟を開き施設を開放したことを意味していた。

私は異国異教の聖域の神秘の扉を開くという歴史的な出来事のために、興奮を覚え且つ不安感の交錯する複雑な気持ちの昂まりを抑えることができなかった。フランクフルト駅より急行列車でアウグスブルグ駅に至り、そこからローカル線で約三十分、小さいオットイリエン駅に降り立つと、そこに修道院長（ノトケル・ボルフ師）と三名の修道士が親愛と歓迎の誠意を全身にみなぎらせて出迎えていた。

修道誓願と靈性（町田）

修道者願と靈性(町田)

Guten Tag / Grü ß Gott /

Ich hei ß e Zesho Machida. Besten Danke /

Vielen Danke für Ihre freundliche Einladung. /

互に初対面の挨拶と握手を交す数分間、日本から胸につかえていた不安と焦燥感とが雲散霧消していくのを覚えていた。温もりの親愛の情が伝わり誠意こもる歓迎に接して不安が払拭されたのである。三週間という短期間ではあったが、共同体百二十名の修道士が、私たちに寄せた隣人愛は本物であった。彼等との出会いは一期一会の尊さを教えられ、その邂逅のなかで靈性の交流を深めていったのである。彼等との出会いの歓喜は日を追って昂まり、三週間の後に袖を別つとき、互に痛哭の涙をながすこととなった。

聖オットイリエン大修道院は西ドイツ・バイエルン州の州都・ミュンヘン München 近郊南西三十キロにある。ベネディクト修道会 Benediktiner に所属し、「祈りと労働」を修道の信条としている。当修道院は一八八七年の創立であり歴史は浅い。接待役のクリスチャン神父の説明によると、三年前までは南ドイツの田舎の無名の修道院であったが、三年前に若くて行動力に富み才幹あふれる現院長ノトケル・ポルフ師によって指導されて以来、いまやドイツ国内のみならず西欧屈指の大修道院へと発展しているという。現に司祭職(修道神父)二十名、技術労働修道士百名を擁する大共同体である。

〈施設・設備の一部紹介〉

(イ)農牧場：四五〇ヘクタール、大型トラクター九台とコンバインで耕作される。

(ロ)境内地：一〇ヘクタール、修道院周囲は高い石塀で区画されているが、境内地は部外者も自由に遊歩できる。施

設の中には許可を得れば出入できる。境内中に蔬菜園・花島・温室五棟・果実園がある。

(イ) 飼育家畜：乳牛三五〇頭・ベルギー産豚二五〇頭・羊三五〇頭・鶏二〇〇羽・牛乳精製量毎日一万六千リットル。オートメ化された衛生機器設備の完備を誇る。余剰牛乳は低単価で市場に販出されている。

(ロ) 印刷製本工場：コンピューター写真植字機・高速度カラー印刷輪転機二台など、超近代化された設備を有し修道院の中核機能を果している。民間からの受注も多く修道士の技術指導のもとに一般市民の傭人も多く働いている。

(ハ) 製材木工場：大小の機器を備えた一大製材木工・建具工場の観がある。優れた技術を有する修道士によって管理されている。

(ニ) 自動車修理工場：自家用車二〇台、農耕機械その他大型機器の保守修理。

(ホ) 消防署：常時スクランブル態勢にある。主に修道院の外に出て市民との協同防災に当たることが多い。

(ヘ) 迎賓館：五階白亜の建築、療養施設も併設し一般市民に開放して利用されている。

(ト) ギムナジウム：男女共学五三〇名、英語・ラテン語・自然科学関係教育に重点、教育水準が高く入学選抜が厳しい。生徒（十才〜二十才）宿舎が完備、教育機器が整備され、国庫補助金（予算に対して）八十パーセントを受けている。民間からの教師が半数を占め、クラス定員三〇名、日本国内では類をみない優れた教育環境である。

(チ) 博物館：東洋の書画・陶磁器類が多く陳列され、観光参詣者に開放展観されている。

(リ) 靴工房：六十四歳になるレオポルド修道士が技術指導に当り、高級の牛皮靴がつくられている。

(ロ) パン工場：毎日百二十名の食膳をみたす。厨房を兼ねている。パンの種類が多く美味であった。私は滞在三週間中に同じものを食したことがない程である。技術主任ローランド修道士の腕前と、コーヒーを献立するヨハネ修

修道誓願と靈性(町田)

道士の意気が合い、食膳は見事のものであった。この二人は私たちの為に午後四時になると特製ケーキをつくりサービスしてくれた。帰朝後二人から靈性交流の意義に関して長い感想文をもらった。その中で日蓮聖人の思想に共鳴するものがあるとの一文に接し、靈性交流に参加したことが少しは報われたのであった。

(ウ)ビール工場：ワイン工場を併設している。南ドイツは世界的なビール生産地である。当修道院も良質のビール・ワインを生産して市場に出荷している。生水が飲めないので修道士も私たちも、朝から晩にかけてビール(アルコール八パーセント)と特製ジュースを飲料としていた。

(カ)図書館：全館開架式・三階建吹貫となっている。十四万冊の蔵書、世界的に貴重な書籍・古書を蔵す。修道士の知的活力の源泉であり、修道院中屈指の重要施設。それにしても三階建開架式十四万冊の書架は壯観である。私が日蓮聖人の講義をしたときには、姉崎正治博士著「日蓮」(英文)を通読している者が数名いた。

(コ)大聖堂 der Konfuzianische Tempel…石と鉄骨コンクリート造り、側壁と床は大理石、堂内には裝飾がない。大鐘樓の尖塔頂きまで高さ八十メートル。信者席は三階設けられている。修道院最重要施設、一日五回の修道士全員会衆の祈りが行われる。

(ク)修道士館：白亜の三階建の棟が二つあり、各自に個室が与えられている。(旧くはヴェネディクト修道戒律によって、長老を中心に大部屋であったが今は改められている。)家具調度品は信者等からの寄進物が多い。各個室・廊下は大理石と石壁で鏡の如くに磨かれている。院内の修道士は互に微笑し軽く頭を下げて音もなく静かにすれ違ふ。修道士館内への一般人の出入は厳禁されている。

△通常の日課▽

前四・五五起床…生活に不慣な私は朝の祈りに参列するために毎朝四・三〇分に起きた。

前五・二〇―五・四五朝の祈り…詩篇（聖書中から百五十篇の祈りの歌を集めた詩集）をドイツ語で誦す。リズムカルな調子にのって誦する。また讚美歌はラテン語で唱われハーモニーされていたが、私はラテン語が解らず閉口苦勞した。

前六・一五―六・五五ミサ…修道士と大聖堂を埋めた参詣者が一体となって祈る時である。全員が両手を胸許で組んで祈る姿は美しく敬虔である。信者は副院長並に数名の神父（司祭）からホスチア（聖なるパン）をうける。院長は修道士たちに授ける。毎朝一人の老修道士（タンザニアの辺境に辛苦の伝道に従い余生を聖オッティリエンに埋没しようとする）が不自由な脚をはこび大理石の床に跪づいてホスチアを受ける姿は峻厳であった。

前七・〇〇―七・三〇朝食…最も簡単な食事で時間内に各自で済ませる。毎朝の献立は、コーヒー、ミルク、（日曜はヨーグルト）、パン（種類が多い）、バター、チーズ、ジャム、果物、ビール（生水の代りに飲む。―南ドイツは朝からビールを飲む習慣があり、市民の中には赤い顔で自動車を運転している者もいた）。

前八・〇〇―一二・〇〇自主修道…修道士は夫々に課せられた修道に精進する（労働・勉学・事務）私たちには特別の日課が組まれ、午前中、院長並に学識豊かな神父から密度の濃い内容豊かな講義を受けた。特に院長の講義は明晰な論理と敬虔な篤信にうらづけされ、情熱がほとばしり、毎日が待ちどうしい程に感銘の名講義であった。―隣人愛・沈黙と謙遜・従順と貞潔・神と人間などの講義内容は今も耳朶に残っている。

正一二・一五―一二・三〇昼の祈り

一二・三五―一三・一〇昼食…一日の食事中最も豪華でカロリーが高い。全員揃って沈黙して静かに摂る。スー

修道番願と靈牲(町田)

ブ・モスト・ジュース・ビール・マカロニ・肉・青野菜・トマト・ポテト・果物など。昼食時にはパン・バター・チーズは無い。

後一四・〇〇―一七・〇〇自主修道：私たちは昼食が終ると隔日に南ドイツ一帯の修道院と教会の訪問に当てられた。一七三九年建立ディーゼン教会、七五三年建立ベスポルン大修道院、一七五〇年建立ウィース教会、一三三〇年建立エッタール大修道院、その他アウグスブルグ市内・ミュンヒェン市内・ランドスベルグ市内の由緒の聖堂を幾つか訪問した。いずれもバロック・ロココ様式の豪壮華麗、或は優美繊細な建物と彫刻、大理石の建造物に圧倒されたが、しかし信仰と修道の立場からみたと、聖オットーティリエンの簡素雄大な聖堂こそ心に残るものがあった。後一八・一五―一八・五五夕べの祈り。

後一九・〇〇―一九・三〇晚餐：大食堂の中央窓辺に高い説教台があり、読書週務者によって食事中朗読が続く。内容は伝道の体験・信仰談・教義に関するものである。全員沈黙して食事を摂るが、ときには朗読が滑稽な話題に入ると一同思わず苦笑する。食事の当番は院長と副院長を除いて、一週間交替で平等に当る。学位を有する修道神父も、労働修道士も全く平等に給仕当番を行う。

後二〇・〇〇―二〇・三〇夜の祈り(終課)

※特に私たち滞在期間中、後二〇・三〇―二一・〇〇まで修道士との討議並に研究会が設けられた。―学殖豊かな修道士、専門技術を駆使して汗する技術労働修道士、そうした彼等との毎晩欠かすことない二時間半の研究討議会は、楽しく、靈性交流を深める充実した時間となった。終日沈黙に徹した修道士が白熱した討議を重ねることは圧巻であった。そうした中で院長は私に対して特に日蓮聖人に就て講義することを要望してきた。私は聖人の人柄

(郷愁と父母追慕の涙、門弟檀越に對して慈悲の涙を流した宗教者)、出生(東海の海辺の無冠の民であったこと)法華經行者(日蓮の名号の意味・法華經色読の意味・四大法難)に焦点をしぼり話した。特に迫害と殉教について講義したときには、イエズスの犠牲と始祖ベネディクトの迫害とが重なり、涙を流して聴いている修道士も居た。

ともかくも彼等から共感を得、日本仏教が「禪」だけではなく、他にもすぐれた思想のあることを理解したようだ。



右の日課は三十秒の狂いもなく厳正に頑固なまでに遵守されている。(日曜祭日は時間と儀礼が変更される)。冬のドイツは寒い。凍て付く大聖堂の大理石の床で一日五回の祈りをするのは老いた修道士にとって苦行となろう。私の短い滞在期間中、修道士の全員は情熱を洋溢させ、清新の氣をみなぎらせ、智慧がきらめき、謙遜を徳として活動していた。一日五回の会衆の祈り、その祈りと祈りの間の自主修道のすべてが、祈りのなかに同化される聖なる時であるように思えた。

修道士は出世も名譽もすべてかなぐり捨て只ひたすらイエズスの愛に生きる生涯である。個性豊かな修道士が多かった。科学者、数学者、音楽家、文学者、技術者、建築家、医者など多士斉である。三階建の豪壮白亜の修道館も、自らが設計、施工、建造したものである。修道士は持てる能力・技術を売りものにはしない。すべて共同体の維持とイエズスに奉獻するのである。ひたすらに隣人愛を蓄えて後日の對他実践活動にそなえているのである。

(3) 偉大なる牧者と羊たち

聖オットーリエン大修道院長は共同体の全員から慈父の如く慕われる人物、全ドイツ国内のベネディクト修道会の

中心的存在であることが要請され、衆人から刮目される優れた指導者でなければならぬ。即ち偉大なる牧者であることが要求される重責を負うのである。

大修道院長はノトケル・ボルフ師と云う。貧農の出ながら卓抜した能力がみこまれ、聖オットーリエン内のギムナジウムの特別奨学生となり、更にローマのアンセルモ神学大学に留学、卒業後は同大学で哲学科主任教授を五ヶ年つとめ、その間信仰黙想の修道に精進し、哲学と神学の学位を得、英・独・仏・伊・拉・露の六ヶ國語を習得している俊英である。一九七七年前院長がローマのアップト・プリマス大修道院へと栄転した後任として、修道士全員の賛成推挙で、その年の十月八日弱冠三十六才で院長の職に就いた。現在、聖オットーリエンには博士号を有する老神父が数人いるが、若き院長がギムナジウム生徒時代の恩師である。その老神父が若き院長の篤信と学才、卓越せる能力に期待して、聖オットーリエンの大牧者として推挙し、今は偉大なる牧者の下で従順しているのである。

私はボルフ院長との邂逅は靈性交流に於ける大きな収穫の一つとしている。彼は睡眠三・四時間、迅速果斷、若き生命の灯を燃焼させて八面六臂の活動をしている。私は若き偉大なる牧者との出会いは、大袈裟な表現をすれば「道元禪師が中国に渡り天童山如浄と対面し、修証一如の機が熟して身心脱落して帰朝した曹洞禪史上の故事にも比しい。道元は如浄と初対面した瞬間、永年の心のわだかまりが雲散霧消し、禪師は感激に震えた」と云う。―感動で心がゆすられる思いであった。初対面の数分の間に不安感・焦燥感が一時に霧散したことは、院長の並々ならぬ人柄によるものと思っている。それにつけても、若い肉体の体力にも限界があろう。忙殺的ハードなスケジュールの中で生命の灯を燃している。夜空に流星の如く光芒を発して消えるのではないか。遠く離れていてもボルフ院長の姿が脳裏から離れず、彼の健康が心配でならない。

九月十六日より三日間、ベネディクト修道会の代表者世界大会が聖オットーリエンで開催された。通常の激務のうゑに世界大会が重なり、院長は会議の主催に忙殺されて睡眠をとることもできなくなり、疲労が感じられその細い体が痛々しかった。しかも、この忙殺の最中、私たちグループ中の駒沢大学の鈴木格禪師が持病の胃潰瘍を再発して二十キロ先の病院に入院病臥する騒ぎが生じた。院長は毎日二十キロの距離を神に祈りつつ車をとばして病床を見舞った。病める修友のために隣人愛を注ぐ有徳の使徒の姿を見た思いであった。

毎朝八時半からの院長の講義が、ときに十分位遅れることがあった。それは迷える羊（悩み迷える修道士）の声に耳を傾け、深い愛情を寄せて親身になって慰め、励まし、ときに叱責して慈愛の掌中に導き入れてゆく。そのため遅刻であった。修道士として人の子である。修道誓願の現成を目指して修道にくれる日々であっても、時には誓願が揺ぐこともあり、故郷の両親を想い、別れた姉妹のことで胸がさわぐ事もある。然し羊たちは肉親との情を断ちきり、つるる想いを放棄して修道誓願の敞しい道をあゆまねばならない。理性では理解できても感情はコントロールできない。この心の葛藤をうち明け、悩みを聞いて欲しいのが人間の情である。その悩み苦しむ所に修道に励む意義がある。こうした弱き迷える羊たちをして、靈性豊かな修道士になるよう導くことも修道院長の大きな職務である。羊たちは偉大な牧者を尊敬し信頼し慈父の如く慕っている。牧者と羊たちとの固い絆をみたときは身震する感動を覚えた。

修道士たちは「祈り働き且つ学ぶ」ことを生活の信条としている。臭気の漂う養豚舎・牛舎において飼育に専念する者、温室栽培に技能を發揮する者、大農場で大型トラクターを駆動して耕作に専念する者、いずれも汗する労働に喜びあふれていた。日本人の我々からすれば不平不満をぶちまけ、逃避したくなるような労働作務を五年十年と続け

ている。彼等にとって労働がそのまま祈りであり、神の召命にかなうものであった。理屈は必要がないのである。只イエズスの愛(恩寵)を求めぬ崇高な聖者の姿がそこにあった。修道士たちと起居を同じくし、對話を重ね、謙遜を徳とする生活(生き方)に接し、また祈りと敬虔な求道の姿をみたとき、修道(修行―受持一行)には理屈や美辞の羅列は必要のないことを痛感したのである。

(4) イエズスの愛とその実践

毎日午前中、修道院長ポルフ師の講義が続けられたが、いま九月十日の講義「イエズスの犠牲」の中から、その一部を要約紹介してみよう。

「イエズスは人類の代表者となって十字架上で犠牲 *die Beute* となりました。……この犠牲は、人間であるイエズスが神の子となったことを意味いたします。……神と人類との間には高くて厚い壁がよこたわっていました。然しイエズスがカルヴァリオ丘の十字架上で犠牲となることで、人類は厚い壁を越えることが可能となりました。イエズスが人類を代表して壁をこわされたのです。イエズスの深い愛が示されました。……こうした神秘的な出来事は理屈では理解できません。思索を重ねても納得はできません。……イエズスは此世の愛の姿であります。愛を他の人々と分ちたいと願っています。キリスト者は、イエズスから与えられた愛を、囲りの人々と分つことで益々深い愛を覚えるのです……」(町田の筆録ノートより)

イエズスの愛とは、他人と分つ隣人愛のことを指している。十字架上の犠牲で示された慈愛 *die Liebe* の事である。私は院長の講義を聴きながら、日蓮聖人の忍難慈勝(慈悲 *die Barmherzigkeit*)の姿を想っていた。修道士は

イエズスの愛を求め、祈り献身する。その献身が对他実践倫理の支柱となっている。

隣人愛の実践例の一つとして、九月八日に訪問した「聖アルバン女子修道院」が併設経営する孤児院エンゲルハイムについて紹介してみたい。

聖アルバン修道尼院は、聖オットーリエンから電車で二十分、アンメル湖畔の風光明媚なデーゼンの一隅に建っている。男子禁制は勿論のこと、信者に対しても禁制を遵守する女子修道院が、日本の仏教徒を迎え入れ歓待の礼を示してくれた。その親愛と寛容には感謝あるのみである。

聖アルバン内の孤児院 *das Waisenhaus* には四歳から十八歳までの子供百人（人種民族雑多）が収容されている。子供たちは躰・学校教育・職業訓練が施され、心身共に健康な子女となって社会へ巣立ってゆく。子供たちの多くは、戦火の彼方に親を喪ったもの、両親の恣意から捨て子となったものなど、人生の悲慘を身に負っている者ばかりである。しかし信仰生活と知的訓練、技術の修得を通して傷心を慰し悲慘を克服する強じんな精神力を身につけてゆくのである。

孤児たちの世話は修道女 *die Nonne* が当っている。十五人を一グループ（一家族）として、食堂・風呂付の設備が完備した室の中で家族的生活を送っている。一グループに二人の修道女が責任をもつて当り、さらに政府派遣の保母二人が付添い寝食を共にしている。修道女は修道生活そして孤児の世話に全身を捧げる。黒衣の修道服をジューパンとブラウスに着替え、労働にも汗して精を出す。―私たちの接待と案内役は、院長ボンファチア修道尼と、若い明眸皓齒の色白の修道女が当った。院長は叡知があふれ（五十歳）雄弁で質問にもよく答えた。隨身した修道女は何事も控え目であったがその清楚な美しさは類がない程であった。若い修道女の傍らには、五歳位の子供が寄り添い、

母親を慕うごとくに終日はなれなかった。修道女と孤児との心の絆をみた思いがした。ラテン系の子供のようであった。

イエズスの愛、それは清浄（きよらか）な愛と表現してもよい靈性の愛である。私は修道院滞在中、ドイツカトリック新聞・南ドイツ新聞・テレヴィ・ラジオ等の記者会見を通して（またローマ・ヴァチカン放送局記者とのインタビューに於ても）「修道士が厳しい修道生活のなかで培ちかう隣人愛 *die Nächstenliebe* は、恰も仏教が唱導する無縁の者にも注がれる慈悲とあい通じるところがあり、それは清らかな愛 *das unschuldige Liebe* と表現してもよい。この愛と慈悲の靈性は東西宗教の違いを超えて将来ともに交流が可能である」ことを強調しておいた。

偶々、グループの一人・駒沢大学教授鈴木格禪師が持病の胃潰瘍を再発させて病院に入った。修道院側にかけて迷惑は多大であった。私たち面々も重荷を負う気持となった。ポルフ院長は殺人的ハードな日程の中から時間を差し繰って入院の手配に奔走され病床を見舞った。接待役クリスチャン神父からは親身の世話を受け、また付添いの修道士は不眠不休の献身的介護など、当に報酬とか職業意識を脱却した「愛に奉仕する姿」そのものであった。私は異国の空の下で愛の教訓を多大にうけた。感激の余り泪をおさえることが出来なかった。クリスチャン神父に尋ねてみた。「どうして日本の異教徒に対して親切にして下さるのか」。神父は微笑しながら「日本の皆様はすべて修道院の修友です。殊に病める修友を世話すること、慰めることは当然のことです。愛とか隣人愛は殊更に論ずることはありません。病院の存在よりは、病める人を責任もって世話する人の居ることが大切なんです」。短い返事ではあったが、隣人愛に生きる修道神父の言葉を聴くことが出来た。

修道士たちの精神的生活は厳しく苦悩を克服する練の連続であるかにみえる。修道誓願を全うするために、肉体的

性愛も、感覺的性欲も脱却して、祈りと労働の中で靈的愛を求め自己を昇華してゆくことは想像する以上に克己心が要請される。十字架上のイエズスの犠牲いけにえを体現しようとする、敬虔な祈りの中に自己を埋没してゆく事は、言外の愛の象徴である。私自身、短い滞留ではあったが次第に雑念・妄念が脱却してゆくのを覚え、彼等と同調して生活が可能となったことは、私の人生体験の中でも貴重な一頁となった。

聖オットイリエンの日課は午前四時五十五分の電鈴で呼び覚まされ、五時二十分大鐘樓の鐘鳴の響と共に胎動する。

主よ、私の唇を開いてください

主よ、私の信仰と希望を深めてください

主よ、私の愛を深めてください

主よ、私は讚美をささげます

主よ、私はあなたのみ胸におまかせします

電灯のにぶい照明の下で物音一つしない大聖堂の大沈黙が、百二十名の祈りの説誦で静かに破られてゆく。大理石の床と石造りの堂内に湧まし、なめらかなリズムにのって参詣者も異口同音に和して唱える雰囲気は気持よい響きであった。ドイツ語による詩篇の誦唱のとき、抵抗なく溶けこめるようになっていた。現今の享樂狂亂の世俗の世界とは全く異質の空間であった。肉欲に酔いしれ、肉の奴隸となり苦惱する現実世界とは別である。人間の浄化、精神世界への高い飛翔の可能性をみる事ができた。人間は単なる動物ではない、靈的生命体であることを実感したのである。

修道誓願と靈性（町田）

(5) 大いなる放棄——誓願の意義——

聖オットティリエン修道院に於て正式に修道士となる為には、三回にわたる誓願式を経なければならぬ。——第一回は一年有期誓願式である。一ヶ年の間修練士となって修道生活を体験し、苦しさ・厳しさに耐え修道の理論と實際を学び、一年後に全修道士の半数以上の賛意があれば、第二回の三年有期誓願の修練期が許される。修道士からの指導をうけつつ信仰・教養を深め、性格や知力・特技などが全修道士によってチェックされる。修道士となるための登竜門の間であるから修道は厳格をきわめる。三ヶ年を経て全修道士の三分の二以上の承認を経て、修道誓願 *die Ordensgelübde*（終生誓願）の叙戒式に臨むことが許される。

九月二十三日（日曜）午前九時から二人の誓願式が行われた。東西靈性交流における最大の宗教行事であった。院長の特別のはからいにより誓願叙戒式の日程が繰りあげられ、私たちの参列が許された。以下、記憶を辿って当日の儀式の様子を紹介しておこう。

当日、広い大聖堂の一階から三階まで満席となり後方に立っている信者も居た。二十歳と二十四歳の二人の修練士は黒い修道服を着し十字架と院長の前で修道誓願（従順・清貧・定住・貞潔・生活改善）の誓詞を朗々と唱える。院長が聖書の一部を朗読、青年修道士二人は両手を胸にして赤い絨氈上に神妙に跪づいている。この時、十歳位の少年がシクシクと鳴咽しながら「お兄チャンが神さまに召されて家に帰ってこない。一緒に楽しく遊べなくなる……」。少年は極度の緊張と悲しさの余り声をあげて泣き出してしまった。隣席の母親は必死に鳴咽を抑え、泪をハンカチで拭っていた。突然、異様な光景が展開した。神妙に跪づいていた二人の青年修道士は、赤絨氈上に全身を投棄し、俯

せの形をとり、心身を神に奉獻する姿をみせた。参集した家族たちの嘆きの声はついに慟哭と変り、広い堂内に充満していった。

修道誓願、それは修道士と家族との永の別れを意味している。修道士は自ら求道一筋にキリスト者の世界に没入する歓喜と神の掌に全身を投棄する法悦で身を震わせる。しかし両親や家族にとっては、悲嘆と絶望の衝撃の一日となるのである。いかに篤信の家族であっても、感情と信仰は別である。親子の絆が断ち切られる悲しみに絶望するのである。法悦に歓喜する二人の修道士とは全く対照的に、家族たちの悲嘆にくれる姿は哀れであった。

修道誓願、それは自己の生涯をイエズスに捧げ尽すことを意味している。修道士は名替も社会的地位も、快楽も、血縁者との絆もふり棄てて、有時のときには十字架を背負い生命を賭けて立ち向い殉教してゆく。これが修道誓願の心意気である。二人の修道士は、貞潔と清貧を誓い、神に対する絶対従順のなかに自己を投棄して、断ち難い一切の俗縁を脱却しようと、神の僕となることを誓ったのである。

さて、私は二人の全身投棄と慟哭する家族たちの悲哀の姿をみているうちに、私自身、溢れ出る涙をおさえることが出来なくなっていた。愛する息子と石壁を境として永の別れとなる現実の場に臨んで、異常な世界へと誘引されてゆく自己を覚えていた。脳裏か眼前か、ともかくも往昔七百五十年前の日蓮聖人の立教誓願の英姿が去来し、御両親との今生の別れに断腸の想いを残して故郷を離れた聖人のお姿が、青年修道士とオーバー・ラップして思わず滂沱とめやらぬ感動の一日となった。

建長五年四月二十八日法華正法を宣揚する第一歩をふみだした。両親との間に痛哭の泪を秘めて今生の別れをなし日輪と蓮華とに象徴される生涯を誓願された。当にあれか・これかの岐路に立って、断腸の感慨を胸中深くに秘して

修道誓願と靈性(町田)

別離の愛惜の情を断ち切つて小湊を離れ、巖頭に獅子吼する雄哮の気概を法華一乘の信の中に折りこめ、忍難の生涯をおくられたのである。

私は修道士の誓願する姿を凝視するあいだ、日蓮聖人のお姿が何回となくオーバー・ラップして思わず感泣滂沱の時をすごした。修道士の両親が悲嘆の底にせずむ姿は哀れであつたが、イエズスの愛に生きようとする二人の心意氣、また法華信仰に生涯を賭けようとした聖人、誓願の意味を改めて考えさせられてしまった。遠くヨーロッパの空の下、しかも異教修道院内に於て、誓願の意義を示唆され、法華信仰に生きる法悦の時をすごすとは予想もしなかつた事である。

(6) 痛哭の別離と靈性の交流

修道院と聞けば、私たちは嚴重に閉鎖された暗い秘域を思い出しがちである。事実、ヨーロッパの修道院の多くは高い石塀をめぐらし、千年以上も頑強に閉鎖を続け自らの信仰を固持してきた。然るに、一九六二年から六五年にかけて「第二ヴァチカン公会議」が開催され、旧来のカトリック教会内部の改革が行われ、諸宗教との対話協調の方向が確認され新たな動きが胎動を始めた。こうした教会内部の改革を背景として、昨秋日本宗教界と西欧キリスト教界との交流が実施されたのである。



私は聖オットーリエンに於て、全修道士から親愛にみちた歓待をうけて不安感も解消していったが、宗教儀礼と風俗習慣の相違は如何ともし難く、違和感がなくなるには二・三日を要した。次第に肌を接する挨拶にも慣れていっ

た。(余談ながら、ミュンヘン・アウグスブルグ市内で、よく婦人方から抱擁の挨拶をされたが、次第に慣れて抵抗を覚えなくなった) 修道士も私の気持が柔らかき修道生活に溶けこんでゆくのを敏感にうけとめていた。三日目の朝から聖堂の祈りの席を一般席から上段の修道士席へと移してくれた。

壮健なるミサの時、隣り合せになる左右の修道士との間に「主よ、私の唇を開いてください。私はあなたを讚美します。」と唱え始め、互に向い合って抱擁して祝福の挨拶を交す。修道士たちは日増しに小柄な私をグット抱きしめ氣力をこめて親愛のまことを示してくれられた。私の修道生活は軌道にのった。博士号・修士号を有する修道士から知的刺激をうけ、祈りと労働にも励む三週間であった。私は不思議なまでに嫉妬・憎悪・劣等感・名譽欲といった人間のいやらしさを *die Unannehmlichkeit* 食欲・物欲・性欲といった妄念 *der Wahn* が昇華されてゆくのを覚えていた。とくに性欲が完全に脱却していたことは今にして思えば大脳新皮質の刺激活動が、大脳辺縁系を抑制していたことによるのであろう。自分ながら修道の生活に完全に溶けこんでいたことを知るのである。聖オットーリエン大修道院は、靈性豊かな精神文化の誇りである。また本當の意味で聖域であることを特記しておきたい。勿論、石塀の外の社会にはそのままでは通用しない共同体であることは云うまでもない。

大修道院を離れる九月二十四日は小雨そぼ降る肌寒い日であった。朝の祈り・ミサを済ませ食堂へ降りていったが昨日まで美味であった筈のジュース・ミルクが喉を通らなくなっていた。私は修道士たちとの借別の感情がこみあげていた。ポルフ院長は離院一時間前に私たち一行を院長室に招じ、修道院特製自慢の白葡萄酒で別れの杯を交した。私に対して日本の字を残して欲しいとの要望に応じ、太めのマジックペンを借りて大型カードに日独両語で次のよう

修道誓願と靈性(町田)

修道誓願と盤性(町田)

に書いた。

「院長先生ノ訪問三週間の滞在中の御教示と修道士皆様への心こもった歓待に対して心から感謝を申しあげます。

一九七九年九月二十四日

日蓮宗徒 町 田 是 正

Vater Erzabt./ Fir all ihre freundlichkeit und führung in den drei wochen, die wir bei ihnen
verleben durften, möchte ich ihnen von Gonzen herzen Danken.

24. Sep. 1979. der Nichiren Buddhist; Zesho Machida」

このカードは額に入れられ、私が日本から土産として持参した甲州産水晶(灯笼)の置物と一緒にして院長室に永久保存されることになった。いつの日かこの署名が日本人の目にもふれる事があろう。

ローマ行きの際、バスが発車時がとうとうきた。大聖堂の大小五個の鐘が一斉に響きわたり近隣の市民達も境内に並んで見送ってくれていた。小雨のなか、広場には修道士が濡れそびれて私たちを待っていた。重い荷物はいつの間にか国際バスに積みこまれてあった。一人一人と固い握手、送る者、見送られる者、互に昂まる感情をおさえ嗚咽していた。別離の情にたまらず互に抱き合い、中には小柄な私を軽々と抱きあげ身を震わせ、身を揉んで涙する者が数人も出てきた。

修道士のなかには、当初東洋の異教徒との生活には抵抗を覚えた者も居たと思う。しかしその壁が取り除かれ、国境も、民族も、宗教の違いを超えて、不自由なコトバながら異体同心に修道生活を体験、互に信頼を深め温い人間の交わりを強め、一期一会の邂逅・人間同志の絆をたしかめた者同志が、いま別れて再びまみえる事がない別離の場に来たとき、その惜別の想いがいかなるものであるか。当に断腸慟哭の想いであることは云うまでもない。

九月下旬の雨は冷たかった。しかしその冷たさも友誼の温もりであたためられた。再会をのぞんでも許されない会者定離キヤビリスの決定的な貴重な時を噛みしめていた。ーパン屋のローランド師・コーヒー屋のヨハネス師・郵便局のブルダー・クサフェール師・そして私たちに親しく講義、そして対話の時間をもった、フレメンテウス神父・リンネル神父・レミギウス神父・副院長ドクトル・バアオルス・ボエルグ神父・院長ノトケル・ポルフ神父等々、みんな湧注していた。ローマ行き特別専用国際バスの人となる。見送る人々の顔・姿が泪でばやけていた。バスは非情である。別れ難い私たちを乗せたバスは修道院を離れた。そして聖オットティリエンの重い鉄扉は再び固く閉ざされたのである。修道士と共に互に流した惜別の痛哭の涙、それは愛の結晶であり、美しく清らかに輝いた泪の光芒であった。この痛哭の涙をながすことなくしては靈性の交流はなかったのではないか。今も修道士の顔・顔が脳裏を駆けめぐる。

(7) ローマ法王との謁見

ローマ市から約二十キロ、ネーミ湖畔の「神言会修道院」(Gesellschaft vom Gotlichen Worte Kloster)が、イタリアにおける日本代表团一行の宿泊所となった。私たち聖オットティリエンのグループも、此処で合流して一週間滞留した。この期間中、ローマ教皇パウロ二世との謁見、ローマ史跡見学、靈性交流の反省全体会議など、今回の靈性交流の成果をたしかめる附録的日程の消化にあてられた。

九月二十六日午後二時半、ローマ市内のイエズス会本部を訪問、総会長ベトロ・アルベ神父と会見した。日本側を代表して妙心寺管長山田無文師・花園大学教授藤吉慈海師・身延山短大町田是正の三人が挨拶をした。総会長は答礼され「この度の靈性交流の実施により、日本文化の源泉をヨーロッパに伝え、またヨーロッパの源泉を日本に紹介す

る機会となりましたことを喜びとします。ローマに於てキリスト教の源泉にふれることと思ひます。とくに教皇ヨハネ・パウロ二世との謁見を交流の頂点としてください」と。ヴァチカンには二人の法王が居ると云われているが、その蔭の実力者がベトロ・アルベ総会長であることを知った。上智大学教授門脇佳吉神父は、アルベ総会長の門弟の一人で、門脇教授との再会を心から喜んでいた。

次に午後四時、ヴァチカン諸宗教連絡事務局を訪れ、長官のビネドリ枢機卿（前回の法王選挙における有力候補であった）と会見、此処でも東西靈性交流の歴史的意義が強調され、その実現をよろこんでいた。



此処でローマ法王ヨハネ・パウロ二世（Johannes Paulo II）について少し付記しておこう。パウロ二世はポーランドの貧農の出身、枢機卿（定員七十名）時代ヴァチカンの招集会議には質素の身形（ムカデ）で出席、人々は「おんぼろ車の枢機卿」と呼んだ。しかし卓越した才能（語学だけでも七ヶ国を繰る）と愛の実践者（キリスト者）であることが衆目認める所となり、一九七八年秋、カトリック教会の伝統を担う第二六五代の教皇座に就任した。―法王のヴァチカンにおける日課は次の通りである。前六時起床・一時間のミサと黙想（修道士と当日招待された数名の神父が同席）、朝食、前八時半―十一時まで研究読書、前十一時半―後二時会見（仕事の重要性に応じ順次行われる）、昼食（必ず一・二名の枢機卿が同席）後三時―四時祈り、後四時―七時会見、夕食（食事は質素である）。後十一時まで研究・仕事を続け、十一時より一時間半、法王一人の祈り。就寝。この日課はヴァチカンに居られるかぎりくずれない。

日本宗教界代表团と法王との接見は、九月二十六日午後五時三十分より七時まで、ヴァチカン聖ピエトロ教会で行

われた。(偶々法王は翌日訪米してカーター大統領との会談、全米キリスト信者に対する親教が組まれていた)。訪米を前にした多忙の夕刻時、代表团との接見の時間を設けてくれた。

ローマ教皇は使徒ペテロの正統後継者として、全教会に対する最高の全き統治権を有し、超国家的立場から国際問題・思想問題・人種問題などに対処し、精神的・道徳的指導性を發揮する。一般信者、神父たちの教皇崇敬の念は絶対的なものである。

私は謁見の場において前後三回の握手と祝福をうけた。(他の代表者の羨望的であった)その手は働く者の力強く温い大きな手であり、指導力を秘めた手でもあった。大衆の汗を流す苦勞を知りぬいた手であった。法王自らが歩をはこび私に握手を求めたとき、ヴァチカン放送局報道官の写真の閃光が輝いた。後日この決定的瞬間がタテ五十七センチ・ヨコ六十センチの全紙大写真に引伸ばされて航空便で身延山の小坊に郵送されてきた。予想もしなかったヴァチカンからの贈物となった。現在小坊の居間に掲げている。

法王は代表者との接見の場において、約八分間英語で声明文を読まれた(翌日、声明文は新聞に掲載された)。いま冒頭の部分を少しく紹介しておこう。

「A warm welcome to the Japanese delegation of people connected with religion, mostly representatives of the venerable traditional schools of Buddhism : the Zen, Pure Land, Shingon, and Nichiren schools ; and especially to the eminent leader of Japanese Rinzai Zen.

I thank you for coming to Europe for an East-West exchange on the spiritual level. I am glad that the interreligious dialogue moves on this basic level.」

「日本の宗教関係の代表団、特に伝統的な仏教々団の尊敬すべき最高の指導者の方々―禪・浄土・真言・並に日蓮宗とりわけて日本臨濟禪の高名な指導者を心から歓迎いたします。靈性交流のためにヨーロッパに來られたことに感謝いたします。諸宗教の對話が靈性という深いレベルで行われたことは喜ばしいことであります。……」（町田訳）

私は法王の英語によるメッセージを聴きながら満足するものがあつた。日本からの代表者は曹洞・臨濟・浄土・真言・天台・真宗・時宗・神道などの各宗派の人々で形成されていたが、その中ただ一人の日蓮宗の参加者であつたが「日蓮宗」の宗名が読みあげられたことである。（上智大学の門脇佳吉・安斉伸の兩教授によるヴァチカンへの申込み紹介があつた事が後日わかつた）。教皇との謁見は約一時間半、往々にして斯界の最高位者と会見すると儀礼的形式にながれ、おざなりに成り勝ちであるが、教皇との謁見は違和感の除かれた信頼と尊敬がみなぎる時間であつた。全世界の信者から「法王」と尊敬され、教皇さまと畏敬されるのは当然と思われた。一九八一年（昭和五十六年）二月日本で開催される諸宗教会議には日本訪問を予定されているとのこと。訪日の実現を強くのぞむものである。

(8) エピローグ——反省——

(イ) 靈性の交流とは、

東西靈性の交流、それは心と心・涙と泪の裸になつた人間の絆が結ばれることであらう。しかし、人情や感情だけでは本物の靈性交流はあり得ない。矢張り東西宗教の思想の理解こそ肝要であることを痛感した。

たとえば、キリスト教の黙想 *die Meditation* 瞑想 *die Nachdenken*, *Sinnen*, と禪 *Zen* との会通よつの問題を一つとりあげてみて、ヨーロッパ側の理解をうる為には相當な困難が伴つたのである。禪道における只管打坐と云う「坐

禪」の型 die Form は理解できても、只管打坐の意味は理解し難いようだ。曹洞の某教授は坐禪を説明して「只すわるのみ・神と一体となること」と、再三繰り返していたが、かえって修道士の思考を混乱させたようだ。彼等にとって「神」とは、自己の外にある絶対存在として認識され、崇敬される対象である。この「神」に対する価値観を有する修道士に向って「禪とは神と一体となること」と短絡的に説明されては混乱して当然であらう。修道士によれば黙想・沈思・冥想の概念はすべて「メディタティオン」（思念を凝らす）であり、「坐禪」の内容もメディタティオン（目をつぶり黙想する・沈思する）の概念で理解している。確かに曹洞の打坐にはコトバは不要かも知れないが、しかし彼等に対しては少なくとも「禪は神と一体となること」と表現しないで、瞑想が西欧起源のコトバであり坐禪は純粹な仏教語であることを示し、禪は、何も考えない状態・意識を無にする状態・しかし存在を覚える状態のこと、つまり主観のない存在 *nachte Sein* である、という補足説明があつて然るべきであつたと思う。

東洋の禪思想を正しく理解させる事は容易ではない。キリスト教と仏教との次元の違う精神構造を理解しないで、一方的に我意を主張しても交流はありえない。かえって日本仏教に対する忌避にもなりかねない。彼等に伝える手段としてコトバの問題も大切であるが、最も大事なことは、理論と実践の一致した本物の宗教家によってなされる交流ではないか。

(d) ババリア人気質

私たち聖オットーリエンのグループは、修道院長の特別のはからいによって、東西交流の成果を総り大きくするために、視野を広めて帰国して欲しいとの好意に沿って、修道院を中心とした半径一五〇キロ・二〇〇キロ以内の修道院・教会を見学研修した。ドイツ最古の街アウグスブルグ市・中世の面影を残す歴史の街ランドスベルグ市・ビール

修道哲願と靈性(町田)

と工業の街ミュンヘン市など、或はアルプス山麓まで脚をのびした。(修道院の自家用車を利用、アウト・バーンを疾走した)。いたる所で南ドイツ人の温かい人情・誠実にふれ、親切な歓迎をうけた。底ぬけに明るいババリア人の氣質に接することができた。私たちが修道院で生活している事が有名になっていて、何処へ行っても親切にしていた。勤労にはげむ氣質、誠実である人々、美味のクーヘンを腹いっぱい食べる婦人たち、或は中流の家庭で半日すごした団欒など、観光旅行では味わうことの出来ない、ババリア地方(バイエルン州)の生きた生活を垣間みたことは収穫であった。窓辺と庭には四季を通して花を咲かせ、洗濯の乾物などは人目にふれさせない慣習は学ぶべきことであらう。

(ハ) 雑 感

東西靈性交流という国際的文化交流ニュース(出来事)について、わが日蓮宗が無関心であることに驚いている。テレヴィ・新聞・などマスコミを通して全国に何回も報道されたニュースである。臨済宗を中心とした他宗派では、積極的に交流の成果を特掲してその意義を喧伝している。私の僻みかも知れない。日蓮宗から唯一人、特別招聘されて渡欧、正式に日蓮宗からの派遣ではなかった事にも起因しているかも知れない。然しそれにしても日本的・世界的な文化交流、歴史的な出来事であったのである。宗門当局者が反応も示さないと云うのは淋しいかぎりである。教団の狭まき、閉鎖性を覚えるのである。それでも私の救いとなったのは、立正大学日蓮教学研究所の先生方、並に東京都北部布教師会の諸聖から関心が寄せられ、また池上本門寺「玉成会」から発言の場を与えてくださった事である。記して謝意を表します。

(ニ) 世話になった人々

靈性交流の期間中、次の方々から格別の恩遇と教示をうけた。上智大学教授門脇佳吉氏・安斉伸氏・同大学大学院
峯岸正典氏・同大学東洋宗教研究所中村マヤ女史・駒沢大学助教皆川広義氏・花園大学教授藤吉慈海氏・松緑神道
大和山総務白川栄造氏・南山大学宗文化研究所長ヤン・ファン・ブラフト博士、そして特に南山大学講師ルーデー
・ホルスト神父には、私たちの表現できない日本語とドイツ語の微妙なニュアンスまで理解され、また日本仏教にも
造詣を示されて、私たちの意志を西欧側に伝えるパイプ役を果していただいた。以上の方々以外、私は渡欧の期間
中、臨済・曹洞・浄土真宗・カトリックの方々から多大の厚情にあずかった。これは身延山当局並に私の知友を除い
て、(残念なことではあるが)日蓮宗内では接することの出来ない仏教者の温かい呼びかけであった。

[註]

- (1) 日本宗教界の代表者を迎え入れた修道院は次の通りである。——西ドイツ四ヶ所 (Sankt Ottilien K. Weingarten K. Maria Laach K. Mesched K.) フランス三ヶ所 (Sur Loire. Notre-dame de Jouarre. Sent Luis du temple) ヘルギ一ヶ所 (Westmalle. Monaster de la Vigne) オランダ一ヶ所 (Slangenburgh) イタリア一ヶ所 (Camaldoli)。
- (2) 東西宗教の交流を企画し実施にうつした組織委員は、南山宗文化研究所々長 J・ファン・ブラフト博士、上智大学教授門脇佳吉神父、花園大学長大森曹玄老師、二松学舎大学寺山葛常助教授であった。私は門脇神父から渡欧への招聘を再三受け、固辞したが、四度目の招きには辞することができなくなり、門脇教授の御熱意と厚意を多として日蓮宗から唯一人特別参加となった。渡欧往復航空運賃・滞在費等の支弁を得た。
- (3) 靈性というコトバは日蓮宗では余り用いない。禅宗・キリスト教では夙に常用している。鈴木大拙「日本的靈性」(岩波文庫)では、人間生活の営みの源泉、人間の知情意の根源としている。
- (4) 聖オット依レン修道院 Sankt Ottilien Kloster 八十メートルの鐘樓を備える大聖堂を中心に、修道士宿舎、幾多の生産的施設を有する一大共同体である。生活する修道士は大きく二区分される。(一)は宣教伝道を主とし、高度の神学的教養と信仰に支えられて地上の辺境に挺身する修道神父二十名。(二)に修道院の基盤となる無名の勤勞・技術修道士百名である。修道院内では両者は全く平等である。俗界では全く考えられない絶対平等が遵守されていることは現代の奇蹟であらう。

修道誓願と靈性(町田)

修道者願と経性 (町田)

- (5) 聖オットァリエン修道院滞在グループは次の各氏である。駒沢大学教授鈴木格榊・同大学助教授皆川広義・曹洞宗瑞心寺僧堂土田国和・松縁神道大和山総務白川栄造・上智大学大学院岸正典・身延山短大教授町田是正・指導通訳南山大学講師 Rudi Horst.
- (6) 願書の田楽をドイツ語で訳すべし。
Tagesordnung — An Werktagen —
4.55 uhr Aufstehen.
5.20 uhr Morgenlob (Invitatorium und Laudes) anschlie ß end:
Betrachtung, evtl. stille Messen.
6.15 uhr Gemeinsame Eucharistiefeier (Konzelebration).
12.15 uhr Mittaglob.
12.30 uhr Mittagessen.
18.00 uhr Abendlob (Vesper, Matutin des folgenden Tages).
18.55 uhr Abendessen.
20.00 uhr Komplet (im Mai, Juni und Oktober voller Andacht).
- (7) ノットケル・ホルン院長 Primas Notkele Wolf 篤い信仰と卓抜の指導力・豊かな才能、大修道院の院長にもあわしい風格と品性を備えてゐる。
- (8) 教会史研究の権威 der Vater Frumentius Renner・儀式典礼の権威 der Vater P. Remigius・神学の権威 der Vater Willigius・聖書学の権威 der Vater Johannes Berchman (ラテン語ギリシャ語の造詣があった)。この他に文学・医学・理学・などの学位・修士を有する神父が十五・六名居た。
- (9) イエズス・キリスト Jesus Christus (前四一六〇紀元二八一二九) 通常イエス・キリストと呼称されている。イエズスは、「フライエ語で救世主」キリストはメシヤ Messiah (救世主) のギリシャ語訳で「油そそがれし者」の意。歴史的存在の典拠は四福音書と旧約の預言書。十字架の犠牲の三日目に復活、宣教を下命してペトロを総牧者に任命して昇天、預言を成就したといふ。

(昭和 55、10、16)